

資源物の正しい分別方法を再確認しよう



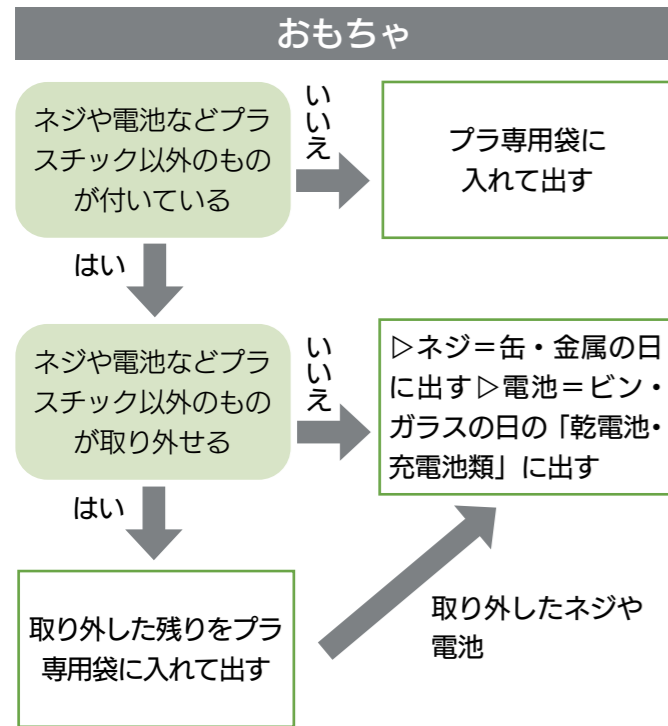
シリーズ「ごみ減量をいかにして成功させるか」④

皆さんの協力のおかげで、プラスチックの収集量が増加しています。しかし、袋の中身を調べるときちゃんと分別ができていないことがあります。プラスチックではないものが混入すると、その選別にかかる費用が増えます。また、発火などの事故の原因になるので、適切な分別をお願いします。分別方法は全世帯に配布している「ごみの分け方・出し方辞典」やごみ分別アプリで検索できます。【問】市生活環境課 (☎ 88・8933)



分別を間違いやすいのはおもちゃとリチウム電池

ネジや電池が入っているおもちゃはプラスチックには分別せずに、缶・金属の日やビン・ガラスの日に出しましょう。また、リチウムイオン電池が入っている製品は、処理過程で火災の原因になり、とても危険です。月後半のびん・ガラスの日の「乾電池・充電電池類」に出してください。



廃棄物対策課は生活環境課に統合

4月から廃棄物対策課は市役所柳川庁舎2階の生活環境課へ統合します。連絡先が変わるので注意してください。

- ごみの分別や収集ルート、回収漏れに関する相談＝市生活環境課リサイクル推進係 (☎ 88・8933)
- 可燃ごみの直接持ち込みや施設見学に関する相談＝有明ひまわりセンター (☎ 75・1766)

リチウムイオン電池が入っている製品

リチウムイオン電池などプラスチック以外のものが取り外せる

▷電池=ビン・ガラスの日の「乾電池・充電電池類」に出す▷残り=プラスチックのみをプラ専用袋に入れて出す

販売店やメーカーに問い合わせる

主な製品
▷電子タバコ(本体)
▷スマートフォン▷電動歯ブラシ▷電気シェーバーなど

2月の可燃ごみの量

柳川市 966トン	みやま市 350トン
--------------	---------------

2月の市内の可燃ごみの量は966トン(前年同月1137トン)でした。前年同月と比べて14%以上の削減。1000トン以下になったのは合併後初です。可燃ごみの割合は、柳川市73%：みやま市27%でした。3月から有明ひまわりセンターの建設費負担割合を決める可燃ごみの測量が始まっています。引き続きごみの分別にご協力をお願いします。

有明ひまわりセンターで竣工式



2月19日、新ごみ焼却施設「有明ひまわりセンター」で竣工式がありました。有明生活環境施設組合長の金子市長をはじめ、みやま市の松嶋市長や藤丸敏衆議院議員、地元関係者など約70人が出席。式では、金子市長が「ごみ焼却施設としての利用だけでなく、環境学習の場としても活用してほしい」とPRしました。

柳川とおき歴史の話—立花宗茂外伝—第8回

【問】市観光課観光推進係 (☎ 77・8563)



「愛嬌挨拶」に秘められた立花宗茂の思いとは!?

「えいぎょうえいさつ、なかのよかごと」

毎年旧暦10月(亥の月)の、最初の亥の日に、柳川では現在でも、「愛嬌挨拶」と呼ばれる伝統行事が行われています。

この日、各家庭やお店では、玄関付近の部屋や上り口に台や膳を置き、そこへ一升枥や大皿を山盛りにした赤飯が供えられます。飯の上には、白菊や黄菊を飾る習わしがあり、さらには大皿や鉢に盛った膾も出されるそうです。

準備が整う頃、表から冒頭の節を歌いながら、町の子どもたちが手を取り合って、各家を訪ねてきます。子どもたちは、備え付けられた大きな柳箆を使って、赤飯や膾を手の甲に乗せ、各々、それをいただく、また同じように「えいぎょうえいさつ——」と歌いながら、次の家を訪ねていきます。

昔から、柳川のみならず日本各地では、「亥の子」の節句が

ありました。ちょうど秋の収穫期にあたり、餅をついて実りを祝うのがはじまりとされていますが、柳川の風習は独特のもの。

実はこの「愛嬌挨拶」は、立花宗茂の体験をもとに、始まったものと伝えられてきました。

関ヶ原の戦いで、自らは東軍の大津城を開城させながら、宗茂不在の西軍が「まさか」の完敗を喫してしまいました。

宗茂は加藤清正らの説得を受けて、柳河城を明け渡し、牢人の境遇となります。

降るごとく持ち込まれる仕官の話のごとく蹴り、そのうえで宗茂は、京や江戸で牢人生活を送るのですが、この間の挿話として、牢々の主人宗茂につき従ってきた家臣との、逸話が伝えられています。

宗茂は自ら働きに出ません。家臣たちが代わりに仕事をし、牢人の主人を養ったのですが、ときに困窮することも。主従が江戸へ向かう道中、



愛嬌挨拶で提供する赤飯と膾

ちょうど「亥の子」の節句になったのですが、あいにく茶碗も箸も持ち合わせがありません。

仕方なく、家臣が炊いた赤飯を、あり合せの枥に盛り、柳を削った箸で、宗茂は飯を自らの手の甲に受けて食べ、その箸を家臣に渡して、各々に食べさせ、主従でささやかに節句を祝ったことがあったといわれています。

元和6(1620)年、柳河藩10万9千余石の大名へ復帰し

た宗茂は、苦しかった頃の体験を忘れぬように、と「亥の子」節句には、先のような作法をとるようになったのだとか。

それが城下にも伝わり、宗茂を慕う領民は、「愛嬌と挨拶、仲のよいことが大事だ」と唱え、「亥の子」の節句を祝うようになった、といわれています。

(つづく)

■文Ⅱ 加来耕三